

THE YOMIURI SHIMBUN

読賣新聞

2010年(平成22年)

1月18日 月曜日

震災15年の祈り



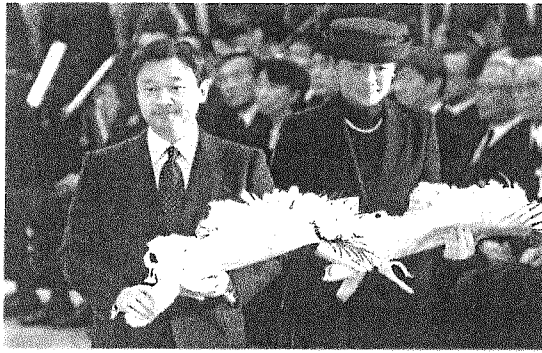
6434人の命が奪われた阪神大震災から17日で15年を迎えた。犠牲者の名前が刻まれた「慰霊と復興のモニュメント」がある神戸市の東遊園地で行われた「1・17のつどい」には、過去最高の約6万6000人が参加。地震発生時間の午前5時46分、竹灯籠^{たけとうろう}1万本が並べられ、「1995」と「1・17」の文字が浮かび上がった。モニュメントでは遺族らが冥福を祈った。追悼式典には皇太子ご夫妻や鳩山首相、遺族らが出席。皇室からの出席は2005年の天皇、皇后両陛下以来で、雅子さまが公務のため泊まりがけで地方を訪問されるのは2年ぶり。首相の訪問は10年ぶりとなる。

犠牲者を悼み黙とうする人たち（17日午前5時46分、神戸市中央区の東遊園地で）＝河村道浩撮影

追悼式典 皇太子さまのお言葉 (全文)

本日、阪神・淡路大震災から15周年を迎えるに当たり、亡くなられた6400余名の方々に、改めて深い哀悼の意を表します。

折しも、数日前にハイチで発生した大規模な地震により、多数の死傷者が出ていると伺って



追悼式典で献花される皇太子ご夫妻
(17日、神戸市中央区の兵庫県公館で)

います。多くの建物や電気、水道などのライフラインに大きな被害が生じ、衛生状態が悪化するなど、被災地は極めて深刻な状況にあるとも伝えられています。今回の地震によって亡くなられた方々に対しても、心から哀悼の意を表しますと

に、ご遺族と被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げ、災害からの復旧や復興が早く進むことを願っております。

今から15年前の今日、この地では、暗闇を切り裂く大地の鳴動が、多くの尊い命を奪い、人々の住み慣れた街と暮らしを一瞬にして破壊しました。震災から1か月後、私ももう一度にわた

り被災地を訪ねましたが、過酷な現実を前に深い悲しみに沈みつつも、互いに声を掛け合い、励まし合っており、困難を乗り越えようとする人々の姿が、今でも深く脳裏に刻み込まれています。その後、震災から1周年と5周年の追悼式を始め、毎年のようにこの地を訪れました。その度に、被災者を始めとする兵庫の皆さんが心を一つにし、全国から集まった大勢のボランティアと共に、懸命の努力で美しい街並みを蘇(よみがえ)らせ

ていく姿を目の当たりにして、深い感銘を覚えました。中でも平成18年に、国民体育大会や全国障害者スポーツ大会が、全国から差し伸べられた温かい支援への感謝の気持ちを込めて開催され、災害から立ち直り、新しく生まれ変わった兵庫の姿を国民の皆さんに印象付けたことは記憶に新しいところです。

首相 追悼の辞(要旨)

6400名を超える尊い命を奪い、未曾有の災害をもたらした阪神・淡路大震災の発生から15年が経過しました。亡くなられた方々の無念さと、最愛の肉親を失われた御遺族の深い悲しみに思いを致しますと、哀惜の念に堪えません。すべての被災者の方々に心からお見舞いを申し上げます。

遺族代表の言葉

松浦潔さん(要旨)

長男「誠」16歳とホームステイをしていたオーストラリア人の「スコット」24歳が我が家で亡くなり、15年が経ちました。建物に押しつぶされ、スコットは即死。誠はベッドで助けてくれと言ったようにベッドの横板をとんとんと叩(たた)いていました。

両足を引っ張りましたが、瓦礫(がれき)の重さで動かせず、冷たくなっていく我が子を見守る事も出来ませんでした。これが現実なのか夢なのか。胃液

が身体を溶かしていくような苦しい毎日が続きました。3年くらい経ったある日、同じく長男を亡くした2人のお父さんと知り合い、自分だけがつらい想(おも)いで生きているのではないと、知(し)られました。生き残った私たちは共に助け合い、語り合い、涙(なみだ)して過ごしてきました。

私たちも、いずれ皆様のところへ参ります。その時、命の限り一生懸命生きてきたよと胸を張って語るように、1日1日を大切に生きていくことを誓います。

で大きな災害が発生しました。兵庫の経験と教訓が、これらの被災地での被害の軽減や復旧・復興にいかされてきたことは、大変意義深いことと思います。さらに、次世代を担う若者たちが、防災活動や災害被害をできるだけ小さくする減災活動に積極的に取り組んでいると聞き、心強く思います。これからも、震災の経験をいかして、皆が助け合い、安全で安心して暮らせる地域づくりが進められるとともに、その過程で培われた知恵が、国の内外を越えて、次の世代に継承されていくことを期待いたします。

最後に、亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りするとともに、ご遺族並びに被災地の皆さんのご健康とご多幸をお祈りして、私の追悼の言葉といたします。

「私には、会ったことのない兄と姉がいます」

「1・17」助け合い誓う小6 「17日のカレー」胸に抱き

阪神大震災から15年の節目が来た。震災後に生まれた世代が自分の言葉で「1・17」を伝え、伝えようとしている。いつも亡き家族を身近に感じながら育った子供たちが、喪った家族への思いは変わらない。(本文記事一面)

「私には、会ったことのない兄と姉がいます」
17日午前、兵庫県芦屋市立精道小で行われた追悼式で、遺族代表のあいさつに立った小学6年の米津英さん(12)(さいたま市)は、何度も深く息を吸い込んでから、こう切り出した。
一家のアパートは全壊し、精道小1年だった兄の漢之君(当時7歳)と、姉の深理ちゃん(同5歳)が

たんすの下敷きになり亡くなった。英さんと弟の凜君(7)は震災後の生まれだ。「最近、兄と姉がいてくれたらいいなと思うことがよくあります。学校での悩みなどを兄と姉なら話すことができると思うからです」
英さんと凜君は兄と姉のお下がりの服を着て、2人のおもちゃで遊び、2人を身近に感じながら育った。「20歳になった姉なら勉



追悼文を読み上げる米津英さん。「他人を支える仕事につきたい」と語った(17日午前、兵庫県芦屋市立精道小で)＝永井哲朗撮影

震災15年

強を教えてくれたり、ピアノの練習を見てくれたりしているでしょう。22歳の兄は弟と一緒に野球をして遊んだりしているでしょう。父の勝之さん(49)と母の好子さん(47)は「夫婦にとつて2人は幼いままでですが、英たちの中では成長して大人になっているようです」と話す。

「我が家では、毎月17日にカレーを食べます」
兄と姉は震災の前日、初めてカレーを作った。翌日の晩ご飯のためだった。だが、2人はそれを口にすることはなかった。がれきの中から見つかった、兄が担任教諭と交わっていた「あのね帳」の最後のページには、△あした、たべるのがたのしみです▽と書き残されていた。

「カレーを食べる時、震災がどんなにひどかったのか、人と人が助け合うことの大切さを改めて兄と姉が私に語りかけてくれた」と思います。大人になっても毎月17日にカレーを食べ続け、兄と姉のこと、震災のことを語り継いでいこうと思います」

しっかりと口調で追悼の言葉を述べた英さん。勝之さんは「震災を語り続ける役目は、この子たちが引き継いでくれるでしょう」と静かに見守っていた。

備えは

今

中

昨年10月17日午前9時、マグニチュード7・3の多摩直下地震が発生。「火災です」と10分後、国立市にある立川消防署谷保出張所に市民が駆け込んだ。消防車2台が現場へ向かい、消防団とともに消火活動を開始した。

同署管内の立川、国立市で35分以内に、6件の火災報告が寄せられた。



住宅が密集する地域では迅速な初期消火が不可欠となる

せられた。同9時40分には、立川市内の住宅で、火をつけたまま放置されたガスコンロから出火した。同45分には、管内に隣接する住宅密集地で火災が拡大。消防車2台を派遣したが、

火の勢いが強い。応援部隊は、すぐには到着しない。これは、東京消防庁の被害想定をもとにした年に1度の演習だ。同署は消防車10台を保有し、消防団も16台を持っているが、

災時の火災による地域別の延焼危険度を想定しており、多摩地区では中央線沿線を中心に、人口や建物が密集する地域で延焼の危険性が指摘されている。住宅密集地には消防車が入れない

消防能力超える多発火災

震災時、市民らの協力を要請

対処しきれない。

シナリオを知らされないまま、指揮を執った海藤芳和署長は「同時多発的な火災に消防だけで対応するのは困難と改めて実感した」と振り返る。

都の試算では、多摩直下地震の最悪のケースでは、多摩地区では約22平方キロ、家が燃え、約5万7000棟が焼失。火災による死者は約160人、負傷者は約2300人に及ぶ。

東京消防庁は5年に1度、震

ため、被害が拡大しやすい。

現在、全建物のうち耐火造、準耐火造の比率を示す不燃化率は、多摩地区の都市部で約46%、山村部で約21%。道路を広げるため、簡単には進まないのが実情だ。

各消防署は、消防車の進入や配置について計画を立て、進入できなかった場合に備え、数メートルに及ぶ送水訓練も実施している。

東京消防庁は、消防隊員・団員の不足を補うため、阪神・淡路大震災後、災害時支援ボランティアの募集を本格的に始めた。一般市民に登録してもらい、震度6以上の震災時に消防署に集まり、消火や救助活動を手伝ってもらうものだ。多摩地区の登録者は計約4800人。

「家族さえ無事なら、少しでも役に立ちたい」。阪神・淡路大震災の被災地の光景をテレビで見ると、ショックを受けて参加したという国分寺市の岡本靖子さん(66)は、こう思っている。

立川市では、消防団のOBの一部も組織化されている。現在、約180人が参加しており、毎年7月に同庁のハイパーレスキュー隊と共同訓練に取り組んでいる。会長の鈴木英次郎さん(62)は「地元は地元で守らないと。経験を生かして即戦力になりたい」と力を込める。

市民自らが火災に備える意識を持たなければ、被害は拡大の一途をたどる。